

5月の連休後半、奥穂高を目指して上高地に入った。目的は二つあった。山頂に登ること。満天の星を見ることだった。どちらも果たせなかった。悪天候が北アルプスを覆った。それでも、上高地から徳澤を過ぎ、横尾山荘で1泊するまではよかった。翌日はアイゼンを履き涸沢まで行った。予定ではそこから穂高小屋に向かいさらに1泊して、奥穂に向かうことになっていた。が、涸沢で雨が雪に変わった。視界は悪くなり、奥穂山頂は断念した。空いた時間で、井上靖の『氷壁』を読んだ。北アルプスの前穂高と徳澤、上高地の美しさが、東京との対比でつづられていく。そのなかに、ロジェ・デュプレの詩が出てきた。目が留まった。



やまもと とうた  
山本 朗太

山行(2)もしか或る日

れ/いとしい妻に俺が帰らなくて  
も 生きて行けと/息子たちに  
俺の踏みあとがふるさとの岩山に  
残っていると/友よ 山に 小  
さなケルンを積んで墓にしてくれ  
ピッケル立てて/俺のケルン  
美しいフェースに朝の陽が輝く  
広いテラス/友に贈る 俺のハン  
マー/ピトンの歌声を 聞かせて  
くれ) ピトンはフランス語で、  
ドイツ語でいうハーケンのこと。

へいつかある日 山で死んだら  
／ふるい山の友よ 伝えてくれ  
母親には 安らかだったと/男らしく死んだと 父親には伝えてく

岩壁や氷瀑(ひょうばく)の登攀  
(とうはん)に用いられる金属製のくさび。岩の割れ目や氷に打ち込み、カラビナやザイルを通し登

攀の手掛かりとする。

美しい山の側面にケルンを積み、亡き友のピッケルを立てる。それが残ったものの務めだという詩だ。デュプラはこの詩を作ってまもなくヒマラヤで消息を絶った。その詩を深田久弥が翻訳し、大学山岳部に属していた西前四郎が曲をつけた。タイトルは「もしか或(ある)日」という。土橋茂子『山の歌集』(山と溪谷社)に全文が載っている。『氷壁』では主人公は、瀧谷で落石に遭い、大腿(だいたい)部からの出血多量で亡くなる。最期を記した手記には「ガス全クナク、月光コウコウ。二時十五分ナリ。苦痛全クナク、寒気ヲ感ゼズ。静カナリ。限リナク静カナリ」とあった。(長崎大熱帯医学研究所教授)